富山県旧砺波郡における登り梁・袖壁付き町家の分布状況及び外観特性

DISTRIBUTION AND DESIGN CHARACTERISTICS OF MACHIYA WHICH HAS NOBORIBARI AND SODEKABE IN THE FORMER TONAMI COUNTY, TOYAMA PREFECTURE

鈴木健斗 ——— * 1 松井大輔 ——— * 2

キーワード：
歴史的建造物, 町家, 外観特性, 景観, 保全

Keywords:
Historic building, Machiya, Design characteristics, Street scape, Conservation

Kento SUZUKI ——— * 1 Daisuke MATSUI ——— * 2

This study is aim to clarify distribution and facade characteristics of Machiya which has NOBORIBARI and SODEKABE in the former TONAMI county, TOYAMA prefecture. The results are as follows; 1) We extracted 649 buildings as Machiya. 2) NOBORIHARI and SODEKABE can be seen in the type of Machiya which has low hight of the second floor. The number is 110. 3) We classified them in 8 types. 4) There's wooden eaves and latticework as common design other than NOBORIBARI and SODEKABE. On the other hand, there's differences of characteristics on the design of SODEKABE and wooden eaves for each towns.

1 はじめに

1-1 研究の背景と目的

都市部の歴史的建造物である町家の活用事例が全国的に増えている。町家は、その成立事情ゆえに地域固有の形式をもつことが指摘されており¹⁾、町家の外観における特徴は地域ごとに異なると考えられる。その特徴を把握して修理・修景をすることが、町家を地域固有の歴史的資源として保存・活用していく上で重要と考える。

富山県旧砺波郡で散見される登り梁構造^{注1)}と袖壁を有する町家(以下、登り梁・袖壁付き町家)も、前述した地域ごとに異なる町家の外観における特徴の一例といえよう。しかし、郡内における登り梁・袖壁付き町家の分布と外観特性の全容は明らかにされていない。これらを明らかにすることが、この地域における複数の町場において町並み保全における、修理・修景の方針を検討する際の基礎資料となり得ると考える。

そこで本研究は、富山県旧砺波郡を対象として、(1)登り梁・袖壁付き町家の分布状況、(2)外観形態による類型、(3)町場間における細部意匠の種類・仕上げの共通点及び相違点を明らかにすることを目的とする。なお、登り梁・袖壁付き町家は北陸地方全域において散在することを推察できるが、本研究は既に登り梁・袖壁付き町家の存在が確認されている城端²⁾、井波³⁾を含む旧砺波郡を対象として先行的に分析を行うことで、その全容を把握するための端緒としたい。

1-2 研究の位置付け

町家の形態について広域的に分布状況を扱った研究としては、棟向きに着目して堅屋・横屋複合型町屋^{注2)}を扱った研究⁴⁾や、軒構造に着目してせがい造りを持つ町家を扱った研究⁵⁾がある。本研究ではこれらの研究と同様に町家の形態に着目する点に加え、町場ごとの細部意匠の共通点や相違点にも着目する点に特徴がある。一方で、町家の細部意匠について広域的に扱った研究としては、異なる藩に

位置する複数の町場における細部意匠の組み合わせの差異を明らかにした研究⁶⁾がある。これに対して本研究は細部意匠の仕上げにも着目する点に特徴がある。また全国の複数の町場を対象とし、町家の形態と細部意匠の分布状況から町家の外観の特徴についてどのような地域的広がりがあるかを明らかにした研究⁷⁾がある。本研究は旧砺波郡という一地域を対象とする点、その地域の複数の町場に点在する登り梁・袖壁付き町家の外観について地域全体の共通点と町場ごとの相違点を明らかにする点に特徴がある。

次に旧砺波郡において町家の外観特性について扱った研究としては、南砺市城端²⁾、井波八日町通り³⁾及び小矢部市津沢⁸⁾を対象としたものがある。しかし、これらは1つの町場のみを対象として町家の外観特性を明らかにしようとした研究であり、本研究は旧砺波郡における全町場を対象とし、町場間で町家の外観の比較を行い共通点と相違点からその特徴を見出そうとする異なる視点を有する。

2 対象地概要と研究の方法

旧砺波郡は富山県西部に位置し、概ね現在の南砺市、砺波市、小矢部市に加え高岡市の一部を含む範囲である。古地図⁹⁾をもとに抽出した結果^{注3)}、郡内には寺内町である城端や門前町の井波、街道沿いの宿場町である埴生、石動、戸出、中田、立野、佐加野、在郷町の福光、福野、津沢、杉木新町、福岡、和田新町の14町場^{注4)}が平野部を中心に点在していることがわかった。これらを本研究の調査対象の町場とする。

各町場における調査は、戦後直後の航空写真¹⁰⁾から概ね戦前の町場である範囲を推定し、参考文献11)を参照して町家の現地踏査を行う。まず、建造物の軒高、屋根、軒下、基礎などから総合的に判断し、概ね戦前に建築されたと推察される建造物を抽出する。さらに、住宅・店舗として使用されている戸建の主屋を抽出し、このうち「接道・

^{*1} 新潟大学大学院自然科学研究科 大学院生
(〒950-2181 新潟市西区五十嵐二の町8050)
^{*2} 新潟大学工学部工学科建築学プログラム 助教・博士(工学)

^{*1} Graduate Student, Graduate School of Science and Technology, Niigata Univ.
^{*2} Assist. Prof., Program of Arch., Faculty of Eng., Niigata Univ., Dr. Eng.

接隣」もしくはそれに準ずる配置形態の建造物を町家として判別する。さらに、町家と判断した建造物については形式・仕上げ・細部意匠などの項目の外観調査及び写真撮影を行う。なお、調査は2017年8月から10月の期間に延べ37日間実施した。

前述の調査から得られた結果を下記の順に分析を行う。まず全ての町家を対象に二階高^{注5)}ごとの軒構造及び袖壁を有する町家の割合を算出し、登り梁・袖壁付き町家の主要な二階高の抽出と郡内における分布状況を把握する。次に抽出された登り梁・袖壁付き町家を対象に外観形態による類型化を行う。その後、町場間で細部意匠の比較を行い、細部意匠の共通点及び相違点を明らかにすることで旧

砺波郡における登り梁・袖壁付き町家の外観特性を把握する。

3 登り梁・袖壁付き町家の棟数及び分布

3-1 町家の残存状況

調査範囲内において、649棟を町家と推定した。町家の棟向き^{注6)}をみていくと横屋が640棟(99%)とほとんどを占めた[図1-a]。次に横屋の町家について階数をみていくと、二階建てが626棟(98%)と最も優勢であった[図1-b]。二階建て以上の町家を対象に二階高をみていくと中二階が282棟(46%)と最も多かった[図1-c]。次いで、低二階の259棟(42%)、つし二階の50棟(8%)となり、二階高の低い町家が半数を占めていることが分かった。

3-2 二階高ごとの登り梁を有する町家の割合と分布

二階建て以上の横屋の町家のうち、二階高と軒構造を共に確認できた601棟を対象に二階高ごとの軒構造の割合をみていく[図1-d]。結果は、つし二階及び低二階では登り梁、中二階ではせがい造り、高二階では垂木構造が最も多く確認された軒構造であった。そのうち登り梁に着目すると、つし二階及び低二階では高い割合でみられたが、中二階や高二階では低い割合となった。したがって、登り梁はつし二階や低二階といった、二階高の低い町家によくみられる軒構造であるといえる。登り梁を有するつし二階及び低二階の町家は133棟確認された。分布は14町場のうち13町場で確認されたことか

図1 町家の棟数及び二階高ごとの軒構造・袖壁を有する町家の割合

図2 各町場における二階高ごとの軒構造の割合

図3 各町場における二階高ごとの袖壁を有する町家の割合

ら郡内に広域的に分布しているといえる。

町場ごとに登り梁を有するつし二階及び低二階の町家の棟数をみていくと、井波が28棟と最も多く、次いで石動が26棟、城端及び福岡が15棟であった〔図2〕。町家の総数は町場によって異なるため、棟数だけでは登り梁を有するつし二階及び低二階の町家の多寡を判断できない。そこで各町場の町家の総数に対する、登り梁を有するつし二階及び低二階の町家の割合をみていくと石動が47%と最も高く、次いで福岡が38%であった。

3-3 二階高ごとの袖壁を有する町家の割合と分布

二階高ごとの袖壁を有する町家の割合を図1-eに示す。袖壁は全ての二階高の種類で確認された。特につし二階で23%(11棟)、低二階で43%(110棟)と二階高の低い町家において高い割合で確認された。したがって、袖壁も二階高の低い町家に多くみられるといえる。袖壁を有するつし二階及び低二階の町家は110棟確認された。分布は14町場のうち13町場で確認されたことから、こちらも郡内に広域的に分布しているといえる。

町場ごとに袖壁を有するつし二階及び低二階の町家の棟数をみていくと、石動が26棟と最も多く、次いで井波の20棟となった〔図3〕。次に各町場の町家の総数に対する、袖壁を有するつし二階及び低二階の町家の割合をみていくと、石動が57%と最も高く、次い福岡が40%であった。以上より、つし二階及び低二階の町家で登り梁と袖壁を有する町家は、それぞれ棟数・割合共に石動に多い結果となった。

3-4 二階高ごとの登り梁・袖壁付き町家の棟数と分布

二階高ごとの登り梁・袖壁付き町家118棟の棟数と割合を表1に示す。登り梁・袖壁付き町家は低二階が99棟(84%)と最も多く、次いでつし二階の11棟(9%)となり、二階高の低い町家がほとんどを占めた。したがって、登り梁・袖壁付き町家はつし二階や低二階といった二階高の低い町家(以下、低二・登り梁・袖壁付き町家)が多いといえる。この低二・登り梁・袖壁付き町家は14町場のうち13町場で確認されたことから、郡内に広域的に分布しているといえる。

町場ごとに低二・登り梁・袖壁付き町家の棟数をみていくと、石動が最も多く25棟、次いで井波が17棟、城端及び福岡がそれぞれ13棟であった。次に各町場の町家の総数に対する、低二・登り梁・袖壁付き町家の割合をみていくと、石動が54%と最も高く、次いで福岡が38%となり、棟数・割合共に石動が最も多い結果となった。

4 低二・登り梁・袖壁付き町家の外観形態による類型

低二・登り梁・袖壁付き町家110棟のうち、仕舞屋^{注7)}であると判断した7棟、及び不明^{注8)}とした9棟を除いた94棟を、二階開口^{注9)}及び間口の大きさ^{注10)}により8タイプに分類した^{注11)}〔図4、表2〕。タイプ1,5がそれぞれ29棟(31%)と最も多く、次いでタイプ3が13棟(14%)、タイプ4が11棟(12%)となった。特殊なものとしては、タイプ7が2棟、タイプ8が1棟確認できた。つし二階では間口が4

図4 低二・登り梁・袖壁付き町家の外観類型

表2 低二・登り梁・袖壁付き町家のタイプ

外観写真	タイプ	棟数 / 割合	二階開口	間口の大きさ	主な開口	主な壁工法・仕上げ	主な前面形態	主な細部意匠	注
	タイプ1	29棟 / 31%	中央開口	4間以下	4間(20)	真壁造り・白漆喰	平面・平面(18)	格子(14) 腕木庇(13)	※()内の数値は全て棟数。 ※割合は対象である94棟に対する割合である。 ※前面形態はハイフンの前が一階、後ろが二階の形態を表している。 前面形態は他に以下のようなものがある。 平面 下屋 雁木 張出
	タイプ2	11棟 / 12%	中央開口	4間半以上	5間(5)	真壁造り・白漆喰	平面・平面(10)	格子(11) 腕木庇(11)	
	タイプ3	13棟 / 14%	片接開口	4間以下	4間(7)	真壁造り・白漆喰	平面・平面(6)	格子(5) 腕木庇(5)	
	タイプ4	5棟 / 5%	片接開口	4間半以上	6間(2) 7間(2)	真壁造り・白漆喰	平面・平面(4)	格子(4) 腕木庇(4)	
	タイプ5	29棟 / 31%	全面開口	4間以下	4間(16)	真壁造り・白漆喰	平面・平面(17)	格子(9) 腕木庇(14)	
	タイプ6	4棟 / 4%	全面開口	4間半以上	5間(2) 6間(2)	真壁造り・白漆喰	平面・平面(4)	格子(4) 腕木庇(3)	
	タイプ7	2棟 / 2%	二箇所開口	4間半以上	6間(1) 7間(1)	真壁造り・白漆喰	平面・平面(2)	格子(2) 腕木庇(2)	
	タイプ8	1棟 / 1%	無開口	4間半以上	8間(1)	真壁造り・白漆喰	平面・平面(1)	格子(1) 腕木庇(1)

図5 低二・登り梁・袖壁付き町家のタイプごとの分布状況

写真1 井波の町並み

写真2 福岡の町並み

二階高	郡内における登り梁・袖壁付き町家の棟数(%)	各町場ごとの内訳: 表記は棟数												
		城端	福岡	井波	福野	津沢	杉木新町	埴生	石動	戸出	中田	福岡	立野	和加野
つし二階	11(9)	0	0	1	0	1	0	0	5	0	3	0	0	1
低二階	99(84)	13	9	16	9	2	0	1	20	8	3	13	1	3
中二階	7(6)	1	3	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0
高二階	1(1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0

補注 カッコ内の数値は、登り梁・袖壁付き町家118棟に対する割合を算出したものである。

図6 井波及び福岡における低二・登り梁・袖壁付き町家の分布

間以下であるタイプ1,3,5がみられ、4間半以上は確認されなかった。

タイプ間の共通点としては、壁面が真壁造りの白漆喰である点と前面形態(表2補注参照)は「平面-平面」が優勢である点、細部意匠に腕木底や格子が多い点などがあげられる。

タイプごとの分布をみていくと、タイプ1,5は他のタイプと比較して郡内に広域的に分布していることがわかった[図5]。タイプ4は城端、福光及び井波で確認されたことから、郡の南側の町場に分布する傾向がみられるといえる。「二箇所開口」のタイプ7は福野及び戸出、「無開口」のタイプ8は佐加野においてのみ確認がされた。次に町場ごとにタイプの分布の傾向をみていくと、石動及び福岡では、「中央開口」のタイプ1,2の町家が多い。また、城端及び井波では「片接開口」のタイプ3,4や「全面開口」で間口が4間以下であるタイプ5が多い傾向がみられた。

特に井波の八日町通り[写真1]や、福岡の旧北陸街道沿い[写真2]においては、低二・登り梁・袖壁付き町家が密集して残存していることが確認された[図6]。

図7 化粧貫の本数ごとの棟数

図8 各町場における化粧貫の本数の割合

図9 板底の仕上げ別の棟数

図10 各町場における板底の仕上げ割合

5 町場間における細部意匠の共通点及び相違点

ここでは低二・登り梁・袖壁付き町家の細部意匠をみていく。町場ごとに共通点のある細部意匠としては、腕木底と格子がある。腕木底は13町場中11町場において確認がされ、棟数は細部意匠の中で最も多く60棟であった。格子は13町場中10町場において確認がされ、棟数は腕木底に次いで多く50棟であり、前面形態が「平面-平面」の町家に多くみられる傾向がみられた。

また共通する細部意匠でも、その仕上げに着目すると町場ごとに相違点があるものも確認された。相違点のある細部意匠としては、袖壁の化粧貫の本数と板底の仕上げがあげられる。袖壁の化粧貫の本数は0本が12棟、1本が19棟、2本が52棟確認された[図7]。各町場における化粧貫の本数の割合をみていくと、2本のものが優勢である町場が多い[図8]。しかし、石動でのみ1本のものが優勢であり、化粧貫が1本であった18棟のうち16棟(89%)が石動に集中している。次に板底を確認できた町家62棟^{注12)}の仕上げをみていくと、厚板^{注13)}が27棟、二重厚板が24棟、こば葺きが7棟、薄板が4棟であった[図9]。板底を1棟しか確認できなかった町場を除いては、複数の仕上げが確認された町場が多い。しかし、井波では10棟全てが二重厚板、福岡では8棟全てが厚板といったように仕上げが1種類に偏っている町場もあった[図10]。なお、格子も共通する細部意

写真3 ニツ屋石の基礎

写真4 ニツ屋石の敷石

匠であったが、町場ごとの相違点は見出だせなかった。また、城端での基礎部分や玄関前の敷石等に二ツ屋石^{注14)}という赤い石を用いている町家が6棟確認された[写真3,4]。

6 結論

(1) 旧砺波郡の14町場において649棟を町家と推定した。そのうち大多数を占める二階建て以上の横屋の町家をみると、登り梁と袖壁は共に、つし二階及び低二階といった二階高の低い町家に多くみられる傾向があった。

(2) 低二・登り梁・袖壁付き町家は110棟確認でき、14町場のうち13町場で確認された。このことから低二・登り梁・袖壁付き町家は郡内に広域的に分布しているといえる。

(3) 低二・登り梁・袖壁付き町家を、「二階開口」「間口の大きさ」により8タイプに分類した。タイプ1,5が最も多く、次いでタイプ3が多かった。開口がないタイプ8は1棟のみ確認された。町場ごとのタイプの分布には偏りがあり、「中央開口」のタイプ1,2は石動及び福岡に多く、「片接開口」のタイプ3,4及び「全面開口」で間口が4間半以下のタイプ5は城端及び井波で多い傾向がみられた。

(4) 細部意匠では腕木庇や格子が町場間で共通する意匠といえる。町場ごとで相違点がみられたものとしては、袖壁の化粧貫の本数と板庇の仕上がりがある。袖壁の化粧貫の本数については、0本、1本、2本という種類があり、化粧貫が1本の袖壁は石動に約9割が集中していた。板庇の仕上がりについては、井波で二重厚板、福岡で厚板のみが確認されるという偏りがみられた。また、二ツ屋石を基礎等を用いている町家は城端でのみ確認できた。

以上より、旧砺波郡において低二・登り梁・袖壁付き町家は広域的に分布していた。この町家の外観は8タイプに分類でき、タイプごとに分布の偏りがみられた。また地域全体における町家の外観には共通点や町場ごとに相違点がみられるものもあり、旧砺波郡においてはこれらをふまえて町家の修理・修景の方針がそれぞれに検討されることが望ましい。

本研究は、登り梁・袖壁付き町家の外観特性を明らかにすることを目的としたため、建築年代の把握は行なっていない。当該地域には登り梁構造の町家だけでなく、出し桁造りやせがいで造りの町家も存在するため、それらを含めた外観特性の時代的变化を整理することが必要だろう。これを今後の研究課題としたい。

謝辞

本研究は、公益財団法人LIXIL住生活財団の助成を受けて実施したものである。

補注

注1) 登り梁構造の町家には、登り梁が軒先まで表出していない町家もあるが、本研究は町家の外観特性を明らかにすることを目的とするため、外部から目視できたもののみを登り梁構造と判別した。

注2) 新潟県では「町屋」と表記することが多いが、富山県では「町家」と表記されることが多いため、本研究では「町家」と表記している。

注3) 参考文献9)の凡例では、丸で記載されているものは「村形」、四角で記載されているものは「驛建」、「町建村」との表記があり、「驛建」「町建村」を町場と判断し抽出した。

注4) 参考文献9)に記載されている町場で明確な境界が判断できない隣接している町場である「福光-福光新町」「石動-福町」「戸出-中之宮-古戸出」

の3箇所はそれぞれを1つの町場として捉えた。

注5) 本研究では、参考文献11)を参考に一階高と比較して二階高が低いものを「低二階」、同程度のものを「中二階」、高いものを「高二階」としている。ただし、旧砺波郡では、一階高と比較して著しく二階高が低い町家が少なからずみられることから、一階高の半分よりも低いものは「つし二階」とする。なお、これらは外部からの目視により判断した。

注6) 本研究では、参考文献11)を参照し、前面道路に対して棟が垂直なものを「竪屋」、平行なものを「横屋」と呼ぶこととする。

注7) 本研究では、一階部分に腰壁を有し、開口が小さい場合、ミセを有しないと推察し、仕舞屋と判断した。

注8) 一階の改造が大きく仕舞屋か町家かを判断できないものを不明とした。

注9) 二階の開口が1つで両側に壁を有するものを「中央開口」、片側のみに壁を有するものを「片接開口」、全面が開口であるものを「全面開口」、開口が二箇所(開口の間に壁を有する)のものを「二箇所開口」、開口を有さないものを「無開口」と定義する。

注10) 調査の結果、間口が4間以下である町家が110棟中69棟と全体に占める割合が高く、4間までが一般的な間口の大きさであることが推察できる。よって、本研究では「4間以下」「4間半以上」で分類をしている。

注11) 二階の開口の位置や間口の大きさにより前面道路からの町家の見え方が変わると考え類型化の項目とした。

注12) 腕木庇のうち板葺きとしている町家が55棟、改造により種類を確認できなかった板葺きとしている町家が7棟あった。ここではこれらの合計62棟を総数としている。

注13) 目視により、板の厚さが1寸以上と判断したものを「厚板」、一寸よりも短いものと判断したものを「薄板」としている。

注14) 二ツ屋石とは南砺市城端と五箇山とのほぼ中間に位置する二ツ屋地方で採掘される石の名称である。

参考文献

- 1) 大場修：近世近代町家建築史論，中央公論美術出版，2005.1
- 2) 中島渥貴，松井大輔，岡崎篤行：南砺市城端における伝統的様式を有する建造物群の外観特性とその変遷 - 明治期から現代にかけての町家を対象として -，日本建築学会北陸支部研究報告集，Vol.59, pp.296-301, 2016.7
- 3) 江島祐輔：井波八日通りの町並み：伝統的建造物群保存地区へ向けて，日本建築学会北陸支部研究報告集，Vol.43, pp.527-530, 2000.7
- 4) 渡辺篤史，岡崎篤行：新潟県下越地方における横屋・竪屋複合町屋の分布及び外観類型 -，日本建築学会計画系論文集，Vol.81, No.722, pp.951-957, 2016.9
- 5) 小林勉，西村伸也，棒田恵，渡辺恵，樋口雅希：新潟県内のせがいで造りを持つ町家の系列に関する研究 - 信濃川・阿賀野川流域・日本海沿岸，各町のせがいで造り形状の比較 -，日本建築学会計画系論文集，Vol.73, No.634, pp.2557-2564, 2008.12
- 6) 八木雅夫，因幡街道沿いの街村集落の町なみ景観に関する研究：伝統的な町家立面の類型化と地域的特徴，日本建築学会近畿支部研究報告集，Vol.28, pp.609-612, 1988.5
- 7) 山田美貴，大場修：町家の外観形式の地方性 - 町家の地域形式に関する分布試論1 -，日本建築学会近畿支部研究報告集，Vol.35, pp.1013-1016, 1995.6
- 8) 黒野弘靖，菊池成朋：街路と屋敷の対応関係からみた在郷町の空間特性 - 小矢部市「津沢」のケーススタディ -，日本建築学会計画系論文集，No.509, pp.143-148, 1998.7
- 9) 礪波郡一町五屋略絵図，富山県立図書館蔵，天保10年(1839)
- 10) 国土地理院，"地図・空中写真閲覧サービス"，<http://maps.gsi.go.jp/>(参照2017.6)
- 11) 渡辺篤史，岡崎篤行：歴史的建造物群に関する基礎的かつ広域的悉皆調査方法の提案 - 町屋を中心とした町並みの残存状況及び外観特性を把握する手法として -，日本建築学会技術報告集，Vol.22, No.50, pp.313-318, 2016.2

[2018年10月3日原稿受理 2018年11月14日採用決定]